通　知

中国共産党中央委員会

（1966年5月16日）

偉大な歴史的文献

北　京　　外文出版社

通　知

中国共産党中央委員会

(1966年5月16日)

偉大な歴史的文献

外文出版社

北　京

毛主席はつぎのように指摘している。党内、政府内、軍隊内および文化界の各方面にまぎれこんだブルジョアジーの代表者は、反革命修正主義分子であって、いったん機が熟せば、権力を奪取して、プロレタリアート独裁をブルジョアジー独裁に変えようとする。これらの人物のうち、一部のものはすでにわれわれによって見破られているが、一部のものはまだ見破られておらず、一部のものは現にわれわれから信頼され、われわれの後継者として養成されている。たとえば、いまわれわれの身辺に眠っているフルシチョフ式の人物がそれである。各級の党委員会はこの点に十分注意しなければならない。

現在の文化大革命は最初のものにすぎず、これからもかならずたびたびおこなわなければならない。毛沢東同志はここ数年らいつねにこうのべている。革命のなかでだれがだれに勝つかは、ひじょうにながい歴史的時期においてはじめて解決されるものである。下手をすれば、資本主義の復活はいつでも起こりうるであろう。全党員、全国人民は、一、二回、三、四回の文化大革命がおこなわれたからといって天下泰平であると考えてはならない。けっして警戒心を失わないよう、十分に注意しなければならない。

目次

通　知……1
中国共産党中央委員会（一九六六年五月十六日）
偉大な歴史的文献……『紅　旗』編集部、『人民日報』編集部…16
（一九六七年五月十八日）
けっして権力を忘れてはならない……『解放軍報』社説…27
（一九六七年五月二十日）
主要な矛盾をつかみ、闘争の大方向を把握しよう……『紅　旗』評論員…34
――中国共産党中央委員会の一九六六年五月十六日の『通知』を学んで
『偉大な歴史的文献』の学習資料……45

通　知

中国共産党中央委員会

（一九六六年五月十六日）

各中央局、各省・市・自治区党委員会、中央各部党委員会、国家機関各部門および各人民団体の党組および党委員会、人民解放軍総政治部

中央は、一九六六年二月十二日に批准・通達した『当面の学術討論に関する文化革命五人小組の報告綱要』を取り消し、**もとの「文化革命五人小組」とその事務機構を廃止し、あらためて文化革命小組をもうけ、これを政治局常務委員会のもとにおく、**ことを決定した。いわゆる「五人小組」の報告綱要は根本的に誤ったものであり、中央と毛沢東同志のうち出した社会主義文化革命の路線に反するものであり、一九六二年の党第八期中央委員会第十回総会の、社会主義社会における階級と階級闘争の問題についての指導方針に反するものである。この綱要は、毛沢東同志がみずから指導し、おこしたこの文化大革命にたいし、また一九六五年九月か

ら十月にかけておこなわれた中央工作会議（つまり各中央局の責任ある同志が参加した中央政治局常務委員会議）において、毛沢東同志がおこなった呉晗批判についての指示にたいして、面従腹背の態度をとり、極力抵抗している。

いわゆる「五人小組」の報告綱要は、実際には、彭真ひとりの報告綱要であり、彭真が「五人小組」の成員である康生同志やその他の同志にかくれて、かれ自身の見解にもとづいてつくりあげたものである。社会主義革命の全局にかかわるこのような重大問題をとりあつかった文書にたいして、彭真は「五人小組」のなかでまったく討論し、相談してはおらず、地方のどの党委員会からも意見を徴してはおらず、中央の正式文書として、中央の審査をうけるとは説明しておらず、中央委員会主席毛沢東同志の同意はなおさら得ていないのである。かれはきわめて不当な手段をとり、独断専行し、職権を濫用し、中央の名をかたって、そそくさとこれを全党に通達したのである。

この綱要の主要な誤りはつぎのとおりである。

（一）この綱要はブルジョアジーの立場に立ち、ブルジョア世界観をもって当面の学術批判の情勢と性格を考察しており、敵味方の関係を根本的に転倒させている。わが国はいま偉大な

プロレタリア文化革命の高まりを迎えている。この高まりは、ブルジョアジーと封建的残余勢力がいまだに保持しているすべての腐敗した思想の陣地と文化の陣地に力づよい衝撃をあたえている。この綱要は、全党が広範な労農兵大衆とプロレタリアートの文化戦士を思いきって立ちあがらせて、ひきつづき敵陣にむかって突進させるよう鼓舞するものではなくて、なんとかしてこの運動を右旋回させようとするものである。この綱要は、混乱した、自己矛盾の、偽善的な字句を用いて、当面の文化・思想戦線における先鋭な階級闘争をあいまいにしており、とくにこの大闘争の目的が、呉晗**およびその他大勢の反党・反社会主義のブルジョアジーの代表者（中央と中央の各機関、各省・市・自治区には、みなこのようなブルジョアジーの代表者がいる）にたいする批判**にあることをあいまいにしている。この綱要は、毛主席が再三指摘した呉晗の『海瑞の免官』の核心が免官問題にあることにふれず、この闘争の重大な政治的性格をおおいかくしている。

（二）この綱要は、すべての階級闘争は政治闘争であるというこのマルクス主義の基本的論点にそむいている。新聞・雑誌が呉晗の『海瑞の免官』の政治問題にふれはじめたばかりのとき、綱要の作者たちは、あろうことか、「新聞・雑誌上での討論は政治問題に局限せず、各種

の学術理論にふれる問題についても、十分に討論を展開しなければならない」といった。かれらはまたいろいろな場合に、呉晗にたいする批判では、核心の問題について語ることを許さず、一九五九年の廬山会議における右翼日和見主義分子の免官問題にふれることを許さず、呉晗らの反党・反社会主義の問題についてのべることを許さない、と広言した。毛沢東同志はいつも、イデオロギーの面におけるブルジョアジーとの闘争は、長期にわたる階級闘争であって、そそくさと政治的結論をくだして解決できるものではない、とわれわれに教えている。彭真は意識的にデマをとばし、呉晗にたいする批判は二ヵ月後に政治的結論をくだすことができると主席は考えている、と多くの人に語っていた。また、二ヵ月後にあらためて政治問題について語ろうともいっていた。かれのねらいは、文化領域の政治闘争を、ブルジョアジーがつねに宣伝しているいわゆる「純学術」討論のワク内にひきいれるにあった。これがプロレタリアートの政治を先行させることに反対して、ブルジョアジーの政治を先行させようとするものであることは、きわめて明白である。

（三）綱要は、いわゆる「放」をとくに強調しているが、問題の本質をすりかえるという手口をつかって、一九五七年三月毛沢東同志が党の全国宣伝工作会議でのべた放の方針を根底からねじまげ、放の階級的内容をまっ殺している。毛沢東同志はちょうどこの問題にふれたとき、「**われわれは、ブルジョアジー、小ブルジョアジーの思想にたいして、なお長期にわたる闘争をすすめなければならない。このような状況を理解せず、思想闘争を放棄するなら、それは誤りである。誤った思想、毒草、妖怪変化はすべて批判しなければならず、それらが思うままにはびこるのを絶対に許してはならない**」と指摘している。毛沢東同志はまた、「**放とは、思いきってみんなに意見をのべさせて、人びとに大胆にものをいい、大胆に批判し、大胆に論争させることである**」とのべている。ところが、この綱要は、「放」をプロレタリアートがブルジョアジーの反動的立場を暴露することと対立させている。この綱要のいわゆる「放」とは、ブルジョア的自由化であって、ブルジョアジーにだけ放を許し、プロレタリアートにはそれを許さず、プロレタリアートがブルジョアジーに反撃をくわえることを許さないことであり、呉晗のたぐいの反動的なブルジョアジーの代表者をひ護することである。この綱要のいわゆる「放」は、毛沢東思想に反するものであり、ブルジョアジーの必要にこたえたものである。

（四）われわれがブルジョアジーの気違いじみた進攻に反撃の火ぶたを切ると、綱要の作者

たちは、「真理のまえには人びとは平等だ」などといい出した。このスローガンはブルジョアジーのスローガンである。かれらはこのスローガンによってブルジョアジーを保護し、プロレタリアートに反対し、マルクス・レーニン主義に反対し、毛沢東思想に反対し、真理の階級性を根底から否定している。プロレタリアートとブルジョアジーとの闘争、マルクス主義の真理とブルジョアジーおよびあらゆる搾取階級の謬論との闘争は、東風が西風を圧倒するのでなければ、西風が東風を圧倒するのであって、平等などというものはまったく問題にならないのである。プロレタリアートがブルジョアジーと闘争すること、プロレタリアートがブルジョアジーにたいして独裁をおこなうこと、プロレタリアートがさまざまな文化領域をふくむ上部構造で独裁をおこなうこと、プロレタリアートが、共産党内にもぐりこみ赤旗をかかげて赤旗に反対するブルジョアジーの代表者をひきつづき一掃することなど、こうした基本的な諸問題で、平等などというものの存在を許すことができるだろうか。ふるい社会民主主義政党は数十年にわたって、また現代修正主義は十数年にわたって、これまで一度もプロレタリアートにブルジョアジーとの平等などというものを許したことがなかった。かれらは、数千年にわたる人類の歴史が階級闘争の歴史であったことをあたまから否定し、プロレタリアートのブルジョアジー

にたいする階級闘争をあたまから否定し、プロレタリアートのブルジョアジーにたいする革命とブルジョアジーにたいする独裁をあたまから否定している。それとは反対に、かれらはブルジョアジーや帝国主義の忠実な手先であり、ブルジョアジーや帝国主義といっしょになって、プロレタリアートを抑圧し、搾取するブルジョアジーの思想体系と資本主義の社会制度を固持し、マルクス・レーニン主義の思想体系と社会主義の社会制度に反対している。かれらは反共・反人民の一群の反革命分子である。かれらのわれわれにたいする闘争は食うか食われるかの闘争であり、そこには平等などというものを問題にする余地はまったくない。したがって、われわれのかれらにたいする闘争も食うか食われるかの闘争以外のものではない。われわれのかれらにたいする関係はけっして平等の関係というものではなくて、一つの階級がもう一つの階級を抑圧する関係、つまりプロレタリアートがブルジョアジーにたいして独裁あるいは専政をおこなう関係であり、なにかこれとはちがった関係、たとえば、いわゆる平等の関係、被搾取階級と搾取階級との平和共存の関係、仁義道徳の関係などというものではありえない。

（五）綱要は、「政治の面で相手を圧倒するばかりでなく、学術と業務の水準の面でも、真に大いに相手をしのぎ、圧倒しなければならない」とのべている。このような学術にたいして

階級的境界線をひかない思想もひじょうに誤ったものである。プロレタリアートが学術のうえで把握している真理、マルクス・レーニン主義の真理、毛沢東思想の真理は、はやくからブルジョアジーを大いにしのぎ、圧倒している。綱要の提起のしかたは、作者がブルジョアジーのいわゆる「学術権威者」をほめちぎり、もちあげ、学術界におけるプロレタリアートを代表するわれわれの戦闘的な新生の力を敵視し、おさえつけようとしていることを示している。

（六）**毛主席はつねに、うち破らなければうち立てられない、といっている。うち破るとは、批判することであり、革命をおこなうことである。うち破るには、道理を説かなければならず、道理を説くことがうち立てることであり、うち破ることを前面におし出していけば、うち立てることもそのなかにふくまれることになるのである。**マルクス・レーニン主義、毛沢東思想は、ほかでもなく、ブルジョアジーの思想体系をうち破る闘争のなかでうち立てられ、たえず発展してきたのである。ところが、この綱要は「うち立てることがなければ、真に徹底的にうち破ることはできない」と強調している。これは、事実上、ブルジョア思想にたいしてはうち破ることを許さず、プロレタリア思想にたいしてはうち立てることを許さないということであり、毛主席の思想とは真っ向から対立するのであり、われわれが文化戦線ですすめている

ブルジョア・イデオロギーを大いにうち破る革命闘争に逆行するものであり、プロレタリアートに革命を許さないということである。

（七）綱要は、「学閥のように横暴であってはならず、権勢をカサにきて人をおさえつけてはならない」とのべ、さらに、「左派の学術工作者がブルジョア専門家、学閥の道にふみこまないように警戒しなければならない」といっている。いったい、「学閥」とはどのようなものなのか。「学閥」とはだれのことなのか。プロレタリアートは独裁を実行すべきでなく、ブルジョアジーを圧倒すべきでないとでもいうのだろうか。プロレタリアートの学術はブルジョアジーの学術を圧倒し、絶滅すべきでないとでもいうのだろうか。プロレタリアートの学術がブルジョアジーの学術を圧倒し、絶滅することがつまり「学閥」だとでもいうのだろうか。綱要が反対のほこ先をむけているのはプロレタリアートの左派であり、マルクス・レーニン主義者に「学閥」というレッテルをはりつけて、逆に真のブルジョア学閥を支持し、学術界でのかれらの崩壊にひんしている独占的地位を維持しようとしていることはあきらかである。**その実、ブルジョア学閥を支持する例の資本主義の道をあゆむ党内の実権派、党内にもぐりこんでブルジョア学閥をひ護している例のブルジョアジーの代表者こそ、本も読まなければ新聞も見ず、**

大衆にも接しなければなんの学問もない、もっぱら「横暴と権勢をカサにきて人をおさえつけること」にたより、党の名をかたる大党閥なのである。

（八）綱要の作者たちは下心をもって、わざと水をにごらせ、階級の戦線を混乱させ、闘争の目標をそらせ、「確固とした左派」にたいして「整風」をおこなうよう要求している。かれらがこのようにあわてふためいてこの綱要をもち出した主なねらいは、ほかでもなく、プロレタリアートの左派をつるしあげることにあった。かれらはもっぱら、左派についての資料をあつめ、さまざまな口実をもうけては左派に打撃をあたえてきたが、さらに「整風」の名目で左派にいっそうの打撃をあたえて、左派の隊列をきりくずそうとはかった。かれらは毛主席が明確に提起した、左派を保護し、左派を支持して、左派の隊列をつくりあげ、拡大するよう強調した方針に公然とさからった。また、他方において、かれらは党内にまぎれこんだブルジョアジーの代表者、修正主義者、裏切り者を「確固とした左派」にしたてあげて、それをひ護した。かれらはこのような手口で、ブルジョアジーの右派の気勢をつよめ、プロレタリアートの左派の威光を落とそうとした。かれらは、プロレタリアートにたいしては憎悪にあふれ、ブルジョアジーにたいしては愛情にみちている。これこそ綱要の作者たちのブルジョア的博愛観な

のである。

（九）プロレタリアートが思想戦線でブルジョアジーの代表者にたいして新たな、激しい闘争をはじめたばかりのころ、しかも多くの分野、多くの地方はまだ闘争に参加しはじめていないか、**あるいは、すでに闘争の火ぶたは切ったが、圧倒的多数の党委員会がこの偉大な闘争の指導について、きわめて理解に欠けており、きわめて真剣さに欠けており、きわめて能力に欠けているとき、**綱要はかえって、闘争のなかではいわゆる「上級の指導」がなければならないとか、「細心で」なければならないとか、「慎重で」なければならないとか、「関係指導機関の承認をうけ」なければならないなどと、くりかえし強調している。これらはすべてプロレタリアートの左派に多くのワクをはめ、多くのご法度（はっと）や禁制をもうけ、プロレタリアートの左派の手足をしばりつけ、プロレタリアートの文化革命に幾重もの障害をもうけようとするものである。ひと言でいえば、大急ぎでブレーキをかけて、反攻・報復に出ようとするものである。綱要の作者たちは、ブルジョアジーの反動的「権威者」に反撃をくわえたプロレタリアートの左派の文章にたいして、既発表のものは、それを極端に憎み、未発表のものは、それをおさえた。**かれらはあらゆる妖怪変化を思いきってオリから放ち、なが年の間われわれの新聞、ラジ**

オ、刊行物、書籍、教科書、講演、文学・芸術作品、映画、演劇、演芸、美術、音楽、舞踏などにはびこらせてきた。また、これまで一度もプロレタリアートの指導をうけることを提唱したこともなく、承認の必要を強調したこともなかった。このように対比してみると、綱要の作者たちはいったいどのような立場に立っていたかがわかるのである。

（十）当面の闘争は、毛沢東同志の文化革命の路線を遂行するかそれともそれにさからうかという問題である。ところが、綱要は、「われわれは、こんどの闘争をつうじて、また毛沢東思想にみちびかれて、この問題（「学術の分野におけるブルジョア思想を徹底的にとりのぞく」ことを指す）を解決する道をきりひらかなければならない」などとのべている。毛沢東同志の『新民主主義論』、『延安の文学・芸術座談会における講話』、『「追いつめられて梁山にのぼる」をみてのち、延安京劇院にあてた手紙』、『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』、『中国共産党全国宣伝工作会議における講話』などの著作は、はやくから文化・思想戦線において、われわれプロレタリアートのために道をきりひらいてくれている。ところが、綱要によれば、毛沢東思想はまだわれわれのために道をきりひらいてくれてはおらず、あらためて道をきりひらかれなければならないのである。綱要は、「毛沢東思想にみちびかれ

て」という旗じるしを看板にして、毛沢東思想にあい反する道、すなわち現代修正主義の道、いいかえればブルジョアジー復活の道をきりひらこうとしているのである。

要するに、この綱要は社会主義革命を最後までやりぬくことに反対し、毛沢東同志をはじめとする党中央の文化革命の路線に反対し、プロレタリアートの左派に打撃をあたえ、ブルジョアジーの右派をひ護し、ブルジョアジー復活のために世論の準備をおこなうものである。この綱要はブルジョア思想の党内における反映であり、徹底した修正主義である。この修正主義路線と闘争することは、けっして小さな事がらではなく、われわれの党と国家の命運にかかわり、われわれの党と国家の前途にかかわり、われわれの党と国家の将来の姿にかかわり、また世界革命にかかわるもっとも重大な事がらである。

各級党委員会は『当面の学術討論に関する文化革命五人小組の報告綱要』の実行を即時停止しなければならない。全党はかならず毛沢東同志の指示にもとづいて、プロレタリア文化革命の大旗を高くかかげ、例の反党、反社会主義のいわゆる「学術権威者」のブルジョア反動的立場を徹底的に暴露し、学術界、教育界、報道界、文学・芸術界、出版界のブルジョア反動思想を徹底的に批判し、これらの文化領域における指導権を奪取しなければならない。このことを

なしとげるには、かならず同時に党内、政府内、軍隊内および文化領域の各界にまぎれこんだブルジョアジーの代表者を批判し、これらのものを一掃しなければならず、一部のものにたいしてはその職務の異動をおこなわなければならない。もちろん、これらのものを信頼して、文化革命の指導工作にあたらせてはならない。ところが、過去においても、現在においても、ひじょうに多くのものがこのような工作にあたっているのはたしかである。これはひじょうに危険なことである。

党内、政府内、軍隊内および文化界の各方面にまぎれこんだブルジョアジーの代表者は、反革命修正主義分子であって、いったん機が熟せば、権力を奪取して、プロレタリアート独裁をブルジョアジー独裁に変えようとする。これらの人物のうち、一部のものはすでにわれわれによって見破られているが、一部のものはまだ見破られておらず、しかも一部のものは現にわれわれから信頼され、われわれの後継者として養成されている。たとえば、いまわれわれの身辺に眠っているフルシチョフ式の人物がそれである。各級の党委員会はこの点に十分注意しなければならない。

この通知は、中央がことしの二月十二日に出した誤った文書とあわせて、県委員会、文化機

関党委員会および軍隊連隊級党委員会にまで送付し、いったいどちらの文書が誤っており、どちらの文書が正しいのか、かれら自身の認識はどうなのか、どのような成績があり、どのような誤りがあるのかについて討論をくりひろげてほしい。

偉大な歴史的文献

『紅　旗』編集部　『人民日報』編集部

一年まえに、われわれの偉大な指導者毛沢東同志がみずから指導し、制定した歴史的文献――中国共産党中央委員会の一九六六年五月十六日の『通知』は、偉大なマルクス・レーニン主義の文献である。この文献がいま公表された。この文献は、プロレタリア文化大革命の理論、路線、方針と政策をうち出して、プロレタリア文化大革命を破壊し、資本主義復活を実現させようとした彭真反革命修正主義集団の陰謀を粉砕した。この文献は、プロレタリア文化大革命の進軍ラッパを吹き鳴らしたのである。

昨年の二月に、彭真がもち出してきた『報告綱要』は、徹頭徹尾の修正主義の綱領であり、資本主義復活の綱領である。この綱領の出現は、彭真修正主義集団の長期にわたる反党・反社会主義の陰謀の大暴露である。『通知』は彭真反革命修正主義集団を暴露し、この集団を破産させた。これは一つの突破口であった。このときから、中国のフルシチョフをかしらとする反

革命修正主義戦線の足並みは乱れはじめた。

毛沢東同志がみずから指導し、制定したこの偉大な歴史的文献は、マルクス・レーニン主義を創造的に発展させて、プロレタリアート独裁のもとでの革命の問題を解決した。

マルクスとエンゲルスは科学的社会主義の理論をうち立てた。レーニンとスターリンはマルクス主義を発展させて、帝国主義時代におけるプロレタリア革命の一連の問題を解決し、一国内でプロレタリアート独裁を実現させる理論的、実践的問題を解決した。毛沢東同志はマルクス・レーニン主義を発展させて、現代のプロレタリア革命の一連の問題を解決し、プロレタリアート独裁のもとで革命をおこない、資本主義の復活を防止する理論的、実践的問題を解決した。これはマルクス主義発展史上における三つの偉大な里程標である。

プロレタリアート独裁のもとでの階級闘争は、一点に集約すれば、やはり権力の問題、つまり、プロレタリアートがプロレタリアート独裁を強化し、ブルジョアジーがプロレタリアート独裁をくつがえそうとするということである。そして、プロレタリアート独裁の転覆をくわだてているもっとも危険なブルジョアジーの代表者は、赤旗をかかげて赤旗に反対し、党と政府の指導機関内にまぎれこんだ、資本主義の道をあゆむ実権派にほかならないのである。

毛主席はこの偉大な歴史的文献のなかでつぎのように指摘している。

「中央と中央の各機関、各省・市・自治区にはみな、このようなブルジョアジーの代表者がいる。」

全党はかならず「プロレタリア文化革命の大旗を高くかかげ、例の反党、反社会主義のいわゆる『学術権威者』のブルジョア反動的立場を徹底的に暴露し、学術界、教育界、報道界、文学・芸術界、出版界のブルジョア反動思想を徹底的に批判し、これらの文化領域におけるの指導権を奪取しなければならない。このことをなしとげるには、かならず同時に、党内、政府内、軍隊内および文化領域の各界にまぎれこんだブルジョアジーの代表者を批判し、これらのものを一掃しなければならず、一部のものにたいしては、その職務の異動をおこなわなければならない。」

「党内、政府内、軍隊内および文化界の各方面にまぎれこんだブルジョアジーの代表者は、反革命修正主義分子であって、いったん機が熟せば、権力を奪取して、プロレタリアート独裁をブルジョアジー独裁に変えようとする。これらの人物のうち、一部のものはすでにわれわれによって見破られているが、一部のものはまだ見破られておらず、しかも一部のものは現にわ

れわれから信頼され、われわれの後継者として養成されている。たとえば、いまわれわれの身辺に眠っているフルシチョフ式の人物がそれである。各級の党委員会はこの点に十分注意しなければならない。」

一年らいのプロレタリア文化大革命の偉大な実践は、毛主席のこれらの科学的論断がいかに英明なものであるかを立証している。

これらの科学的論断は、プロレタリア文化大革命の灯台であり、プロレタリアート独裁を強固にするための灯台であり、社会主義の共産主義への移行を保証するための灯台である。

社会主義社会において、とくに生産手段所有制にたいする社会主義的改造が基本的に完成されたのちに、階級と階級闘争がなお存在するかどうか。社会のすべての階級闘争がなお権力争奪の問題に集中されているかどうか。プロレタリアート独裁の条件のもとでも革命をおこなう必要があるかどうか。だれにたいして革命をおこなうのか。どのように革命をおこなうのか。これら一連の重大な理論的問題は、マルクスとエンゲルスがその当時解決しえなかったものである。レーニンは、プロレタリアートが権力を奪取したのちに、うち破られたブルジョアジーはプロレタリアートよりも強大であることさえあって、四六時中復活をたくらんでおり、同時

に小生産者がたえず新しい資本主義とブルジョアジーを生み出して、プロレタリアート独裁を脅かしており、したがって、これらの反革命的脅威に対処し、それにうち勝つためには、長期にわたってプロレタリアート独裁を強化しなければならず、これ以外に第二の道がないことを見てとっていた。しかし、レーニンはこれらの問題の実際的な解決を待たずに逝去した。スターリンは偉大なマルクス・レーニン主義者であり、かれは実際に、党内にもぐりこんだきわめて多くの反革命的ブルジョアジーの代表者、たとえばトロツキー、ジノビエフ、カメーネフ、ラデック、ブハーリン、ルイコフのやからを一掃した。かれの欠点は、プロレタリアート独裁の歴史的時代全体にわたって、社会に階級と階級闘争が存在し、革命のなかでだれがだれに勝つかの問題は最終的に解決されておらず、下手をすれば、ブルジョアジーが復活する可能性があることを、理論的に認めなかったことである。かれは死ぬ一年前にこの点に気がつき、社会主義社会に矛盾が存在しており、下手をすれば、矛盾が敵対的なものになるかもしれないといっていた。毛沢東同志はソ連の歴史全体の経験に十分な注意をはらい、その一連の偉大な著作と指示のなかで、この偉大な歴史的文献のなかで、またみずからおこし、指導しているプロレタリア文化大革命の偉大な実践のなかで、これら一連の問題を正しく解決した。これはマルク

ス主義がまったく新しい段階に発展したことを示すもっとも重要な目じるしである。二〇世紀の初期に、マルクス主義はレーニン主義の段階に発展した。現代において、それはまた毛沢東思想の段階に発展しているのである。

毛主席はわれわれにつぎのように教えている。プロレタリアート独裁の条件のもとでは、革命の主要な対象はプロレタリアート独裁の機構内にまぎれこんだブルジョアジーの代表者であり、資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派である、と。資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派と広範な労働者・農民・兵士、革命的幹部、革命的知識人との矛盾は主要な矛盾であり、敵対性の矛盾である。この矛盾を解決するための闘争は、プロレタリアートとブルジョアジーという二つの階級の闘争、社会主義と資本主義という二つの道の闘争の集中的なあらわれである。資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派をあばき出し、かれらの例の一連の修正主義のしろものを大衆のまえにひき出して、それを徹底的に批判し、かれらを闘争によって鼻もちならないものにし、たたきつぶし、うち倒し、かれらにたいして奪権闘争をおこなうこと、これこそプロレタリア文化大革命が解決しなければならない主要な問題である。これは闘争の大方向である。われわれはかならずこの闘争の大方向をしっかりとつかん

でおかなければならない。

毛主席がこの文献のなかでのべている、われわれの身辺に眠っている「フルシチョフ式の人物」が、いま広範な大衆によって摘発されている。この中国のフルシチョフとは、資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派のことであり、プロレタリアート独裁内部のブルジョアジーの総代表者のことである。いまあばき出されている諸事実が証明しているように、この資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派は、むかしからの日和見主義者である。全国的な勝利がかちとられるまえに、かれはプレロタリアートが権力を奪取することに反対していた。全国的な勝利をおさめたのちに、かれはプロレタリアート独裁に反対し、社会主義革命に反対し、中国で資本主義を実行しようとした。生産手段所有制にたいする社会主義的改造が基本的に完成されたのちに、かれは中国で資本主義を復活させようとした。いまあきらかになったところによると、彭真の反革命修正主義の『二月綱要』は、ほかでもなく、かれが支持したものであり、つまり、かれの綱領なのである。

プロレタリア文化大革命の大衆運動のなかで、かれはどんな役割を演じただろうか。**かれは反動的なブルジョアジーの立場に立って、ブルジョアジー独裁を実行し、すさまじい勢いで展開されるプロレタリア文化大革命運動をおさえつけ、是非を転倒させ、黒白を混同させ、革命派を包囲攻撃し、異なった意見をおさえつけ、白色テロをおこなって、自分は得意然となり、ブルジョアジーの威光を高め、プロレタリアートの志気を弱めさせた。これはまたなんと悪らつなことだろうか！**

いま、みんながはっきりと見てとっているように、毛主席がこの偉大な歴史的文献のなかでのべている反革命修正主義分子、また、いったん機が熟せば、権力を奪取して、プロレタリアート独裁をブルジョアジー独裁に変えようとするような主要な人物は、まさにこの資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派にほかならないのである。

資本主義の道をあゆむ党内最大のひとにぎりの実権派が摘発されたことは、われわれ社会主義国家の命運と世界革命の前途にかかわるもっとも重要なできごとであり、プロレタリア文化大革命のもっとも大きな成果である。全中国の革命的人民と全世界の革命的人民は、こぞってこの偉大な勝利に歓呼している。帝国主義と現代修正主義が中国でかれらの代理人をつうじて転覆活動をおこなおうとした陰謀は、最大の失敗をなめたのである。

国際プロレタリアート独裁の歴史での最大の教訓は、最初の社会主義国ソ連で、修正主義集

団に党と国家の指導部をのっとられ、資本主義の復活がおこなわれたことである。その他のいくつかの社会主義国でも、こうした事態がおこっている。われわれの偉大な指導者毛主席はまさに国際プロレタリアート独裁の歴史的経験を総括して、なん億という大衆を立ちあがらせ、今回の史上に前例のないプロレタリア文化大革命をおこなったのである。これはわれわれの党と国家を永遠に変色させないためのもっともたしかな保証である。これは毛沢東同志の国際プロレタリアートにたいする理論と実践の面からの最大の貢献である。

この文献のなかで、もと彭真反革命修正主義集団がひとり占めにしていた「文化革命五人小組」を廃止し、あらためて中央文化革命小組をもうけ、これを中央政治局常務委員会のもとにおくと発表した。これはプロレタリア文化大革命をおしすすめるうえでの重要な措置である。

この偉大な歴史的文献が公表されたことは、われわれの国家の政治生活のなかでの重大なできごとであり、国際共産主義運動のなかでの重大なできごとでもある。

いま、わが国のプロレタリア文化大革命はすでに偉大な勝利をおさめているが、われわれのまえにはまだ重大な闘争任務がおかれている。われわれは政治、思想、理論の面から資本主義の道をあゆむ党内最大のひとにぎりの実権派を徹底的に批判しなければならない。われわれは

プロレタリア革命派の大連合をいっそう実現させ、もっとも広範な大衆と団結し、大多数の幹部と団結しなければならない。われわれは革命的「三結合」をおこない、権力奪取を必要とする地方や部門で、真に権力をプロレタリアートの手中に奪取しなければならない。われわれは大批判運動を所属単位の闘争、批判、改革* とむすびつけて、各単位の闘争、批判、改革の任務を勝利のうちに完成しなければならない。われわれはまたいっそう立派に「革命に力をいれ、生産をうながし」、社会主義建設の各分野の事業をいっそう繁栄させなければならない。

党中央は、すべての革命的同志がみなこの文献を真剣に学習するようよびかける。この文献の学習をつうじて、当面の闘争の新たな情勢とむすびつけて、ここ一年らいの闘争経験とむすびつけて、毛沢東思想でいっそう自分を武装し、毛主席がうち出したプロレタリア文化大革命の理論、路線、方針、政策をいっそう深く体得し、把握して、プロレタリア文化大革命をさい

* 闘争、批判、改革とは、資本主義の道をあゆむ実権派と徹底的に闘争し、ブルジョアジーの反動的学術「権威者」を批判し、ブルジョアジーとすべての搾取階級のイデオロギーを批判し、教育を改革し、文学・芸術を改革し、社会主義の経済的土台に適応しないすべての上部構造を改革することである。

ごまでやりぬかなければならない。

現在の文化大革命は最初のものにすぎず、これからもかならずたびたびおこなわなければならない。毛沢東同志はここ数年らいつねにこうのべている。革命のなかでだれがだれに勝つかは、ひじょうにながい歴史的時期においてはじめて解決されるものである。下手をすれば、資本主義の復活はいつでも起こりうるであろう。全党員、全国人民は、一、二回、三、四回の文化大革命がおこなわれたからといって天下泰平であると考えてはならない。けっして警戒心を失わないよう、十分に注意しなければならない。

（一九六七年五月十八日づけ『人民日報』）

けっして権力を忘れてはならない

『解放軍報』社説

われわれの偉大な指導者毛主席がみずから指導し、制定した中国共産党中央委員会の一九六六年五月十六日の『通知』が公表された。これは、わが国七億人民の政治生活における大きなできごとであり、国際共産主義運動における大きなできごとである。われわれはこの偉大な歴史的文献の発表に熱烈に歓呼する。

この『通知』は、わが国のプロレタリア文化大革命の最初の綱領である。毛主席は、この偉大な歴史的文献のなかで、また一連の偉大な著作と指示のなかで、さらにみずからおこし、指導しているプロレタリア文化大革命の偉大な実践のなかで、プロレタリアート独裁のもとで革命をおこない、資本主義復活を防止することについての理論的、実践的問題を正しく解決した。これはマルクス・レーニン主義の画期的な、輝かしい発展である。これはマルクス・レーニン主義発展史上における新しい里程標であり、マルクス・レーニン主義がまったく新しい段

階――毛沢東思想の段階に発展したことを示すものである。

毛主席はここ数年らいつねにわれわれに、革命のなかでのだれがだれに勝つかは、ひじょうにながい歴史的時期においてはじめて解決されるものであり、下手をすれば、資本主義の復活はいつでも起こりうるであろう、と教えている。偉大な歴史的意義をもつこの文献のなかでも、**毛主席ははっきりとこう指摘している。「党内、政府内、軍隊内および文化界の各方面にまぎれこんだブルジョアジーの代表者は、反革命修正主義分子であって、いったん機が熟せば、権力を奪取して、プロレタリアート独裁をブルジョアジー独裁に変えようとする。」**

毛主席のこれらの指示はわれわれにはっきり教えている。社会主義の時期全体における、プロレタリアートとブルジョアジーという二つの階級、社会主義と資本主義という二つの道の闘争は長期にわたるものであり、複雑で、先鋭なものである、と。この闘争の焦点は権力の問題である。プロレタリアートは権力を奪取してからも、なお権力を失う可能性が存在している。資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派は、われわれの心臓部にもぐりこんだもっとも危険な敵である。われわれは自己の権力を強化しようとする。かれらはわれわれの権力をのっとろうとする。これは敵対的な矛盾であり、食うか食われるかの闘争である。プロレタリ

アート独裁のもとでの大民主を実行し、下から上へと広範に大衆を立ちあがらせてはじめて、これらの反革命修正主義分子をたえず排除していくことができ、闘争のなかで、広範な大衆の修正主義を防止し修正主義に反対しようとする自覚を高めていくことができるのである。こうしてはじめて、プロレタリアートの権力を強化することができ、それを失うようなことがなくなるのである。

林彪同志がわれわれに指示しているように、権力をにぎれば、プロレタリアート、勤労人民はすべてを手にいれることになり、権力を失えば、すべてを失うことになる。事がどんなに複雑で、こみいっていようとも、けっして権力を忘れてはならない。権力を忘れることは、マルクス主義の根本的観点を忘れることである。それはおろか者であって、自分の首がとんでも、どうしてとんだかわからないのである。

わが国が解放されてからの十七年間、ブルジョアジーとプロレタリアートのあいだの奪権と反奪権の闘争はひじょうに先鋭なものであった。プロレタリア文化大革命のなかであばき出された大量のおどろくべき事実が物語るように、中国のフルシチョフがわれわれの身辺で眠っており、そのひ護をうけて、一部の地方、一部の部門では、われわれの権力はすでに、資本主義

の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派にこっそりとぬすみとられていたのである。これらの悪党どもは赤旗をかかげて赤旗に反対し、プロレタリアート独裁の看板をかけて、実際には、われわれにたいしてブルジョアジー独裁を実行していたのである。かれらは、すでにかすめとった一部の権力を利用し、大いに資本主義復活の活動をおこなって、全国の権力を奪いとり、国家全体を変色させようとたくらんできた。いま、広範な革命的大衆は、資本主義の道をあゆむ党内最大のひとにぎりの実権派を摘発し、大小のフルシチョフ式の人物をつぎつぎと摘発した。これはこの一年らいプロレタリア文化大革命がおさめたもっとも重大な勝利である。

わが軍隊はプロレタリアート独裁の礎石である。資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派がプロレタリアートの権力をのっとるには、どうしても軍隊内にまぎれこんだブルジョアジーの代表者と結託して、プロレタリアートの軍権をのっとらなければならない。彭真反革命修正主義集団のもうひとりの頭目は、軍事指導の重要な職務をかすめとっていた反革命修正主義分子である。この反革命修正主義分子は、反党、反社会主義、反毛沢東思想の陰謀家、野心家である。かれは、毛主席の軍事路線に反対し、政治先行などについての林彪同志の一連の指示に反対し、がん強にブルジョア軍事路線を実行した。かれは資本主義の道をあゆむ党内最

大のひとにぎりの実権派と結託し、私党を組んで、軍隊のっとりと反党の陰謀活動をおこない、いったん機が熟せば、われわれの権力を奪いとり、資本主義を復活させようとたくらんでいた。毛沢東思想の光によって、この反革命の二面派はいち早く見破られ、摘発され、軍隊のっとりと反党の陰謀は粉砕された。これはわが軍のプロレタリア文化大革命の最初の偉大な勝利であり、プロレタリアート独裁を強化するうえでの大勝利であり、毛沢東思想の大勝利である。事実がふたたび示しているように、どのような階級敵の軍隊のっとりと反党の陰謀も成功するものではなく、さんざんな目にあうだけである。偉大な統帥者毛主席がみずからつくりあげ、毛主席の親密な戦友林彪副統帥が直接指導する偉大な人民の軍隊は、高度の政治的自覚をもち、毛主席にかぎりなく忠実な軍隊である。

わが軍隊はプロレタリアート独裁のもっとも重要な道具である。人民の軍隊がなければ、プロレタリアート独裁もありえない。わが軍隊の同志はかならず階級的警戒心をよりいっそう高めなければならない。わが軍隊のいかなる部門、いかなる単位の指導権も、反革命修正主義分子、ブルジョアジーの陰謀家、野心家に奪われるようなことがあってはならない。人民の鉄砲は、かならず永遠に毛主席に忠実であり、毛沢東思想に忠実なプロレタリア革命家の手中にに

ぎられていなければならない。

わが軍隊の同志は国家の大事に関心をよせ、片時も権力の問題を忘れてはならない。われわれは、外からの敵が公然と武力をもってわれわれの権力を奪いにくるのを粉砕する用意をつねにととのえておかなければならないだけでなく、内部の資本主義の道をあゆむ実権派がこっそりとわれわれの権力をかすめとるのにも十分な注意をはらわなければならない。指導権をのっとられたところでは、われわれは広範な革命的大衆とともに、資本主義の道をあゆむ実権派の手中から断固として権力を奪回しなければならず、またプロレタリア革命派が権力をりっぱに掌握し、りっぱに運用するよう援助しなければならない。

毛主席は、「現在の文化大革命は最初のものにすぎず、これからもかならずたびたびおこなわなければならない。全党員、全国人民は、一、二回、三、四回の文化大革命がおこなわれたからといって天下泰平であると考えてはならない。けっして警戒心を失わないよう、十分に注意しなければならない」、と指摘している。われわれは毛主席のこの指示をしっかりと銘記し、社会主義の時期における階級闘争の長期性を十分に認識し、プロレタリアート独裁のもとでの復活と反復活の闘争の長期性を十分に認識しなければならない。

全軍の同志は、党中央の呼びかけに熱烈にこたえ、この偉大な歴史的意義をもつ文献――中国共産党中央委員会の『通知』――を真剣に学習し、プロレタリアート独裁のもとで革命をおこない、資本主義の復活を防止することについての毛主席の理論と実践をいっそうよく体得し、毛主席の提起したプロレタリア文化大革命の理論、路線、方針、政策をいっそうよく体得し、把握し、プロレタリアートの連続革命の精神を発揚し、プロレタリア文化大革命を最後までやりぬき、社会主義革命を最後までやりぬいて、われわれプロレタリアートの祖国を永遠に変色させないようにしなければならない。

（一九六七年五月二十日）

主要な矛盾をつかみ、闘争の大方向を把握しよう

——中国共産党中央委員会の一九六六年五月十六日の『通知』を学んで

『紅　旗』評論員

プロレタリア文化大革命のなかで、われわれはかならず主要な矛盾をつかまなければならない。また主要な矛盾をつかんではじめて、闘争の大方向をしっかりと把握することができるのである。

プロレタリア文化大革命のなかでの主要な矛盾とはなにか。一九六六年五月十六日の中国共産党中央委員会の『通知』——この偉大な歴史的文献が、この問題に明確な回答をあたえている。

毛主席がみずから指導し、制定したこの偉大な歴史的文献は、まさに闘争のほこ先を「ブルジョア学閥を支持する例の資本主義の道をあゆむ党内の実権派、党内にもぐりこんでブルジョア学閥をひ護している例のブルジョアジーの代表者」にむけている。この文献のなかで、毛主席はつぎのように指摘している。「党内、政府内、軍隊内および文化界の各方面にまぎれこんだブルジョアジーの代表者は、反革命修正主義分子であって、いったん機が熟せば、権力を奪取して、プロレタリアート独裁をブルジョアジー独裁に変えようとする。」これらの反革命修正主義分子にたいしては、かならず徹底的に批判しなければならず、かならず一掃しなければならず、かならずかれらがかすめとった指導権を奪いかえさなければならない。「かれらにたいするわれわれの闘争も、食うか食われるかの闘争以外のものではない。」

これをいいかえると、プロレタリア文化大革命のなかで、われわれが解決しなければならない主要な矛盾は、プロレタリアートと資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派との矛盾である。このような矛盾は敵対性の矛盾であり、敵味方の矛盾である。この主要な矛盾を解決し、闘争のほこ先を資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派にむけることこそ、今回のプロレタリア文化大革命の闘争の大方向である。

プロレタリアートと資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派との矛盾は、わが国におけるプロレタリアートとブルジョアジーという二つの階級の闘争の集中的なあらわれであ

り、社会主義と資本主義という二つの道の闘争の集中的なあらわれである。これはプロレタリアート独裁の条件のもとでの、とりわけ生産手段所有制の社会主義的改造が基本的になしとげられてからの階級闘争の最大の特徴であり、また客観的法則のひとつである。

資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派は、ブルジョアジーの利益を集中的に代表し、ブルジョアジーの要求を集中的に反映している。かれらは「赤旗」をかかげて赤旗に反対している。かれらは「党と政府の指導者」という姿であらわれ、ブルジョアジーのためにものを言い、ブルジョアジーのために働いている。かれらはかすめとった党と国家の権力をつかって、ブルジョアジーの政策を実行し、プロレタリアート独裁をブルジョアジー独裁に変えようと懸命になっている。要するに、党内にもぐりこんだブルジョアジーの代表者は、プロレタリアート独裁機構の内部に、中国のフルシチョフをかしらとするブルジョアジーの司令部をひそかにもうけたのである。したがって、われわれは、力を集中してこのブルジョアジーの司令部をたたきこわし、かれらの一連の反革命修正主義のしろものをほりさげて批判し、徹底的に批判し、鼻もちならないものになるまで批判しなければならないのである。そうしてはじめて、もっとも大きなガンをとりのぞくことができるのであり、プロレタリアート独裁をうちかため

ることができるのであり、またわれわれの国家を変色させないよう保証することができるのである。

二つの階級、二つの道の矛盾が、プロレタリアートと資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派との矛盾として集中的にあらわれることは、毛主席がはやくから指摘していたところである。

一九五七年、毛主席は『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』というこの輝かしい著作のなかで、「**修正主義は教条主義よりもさらに大きな危険性をもっている**」と指摘している。ここで言われている修正主義とは、国内では、主として党内におけるブルジョアジーの代理人をさすのである。

一九六三年五月、毛主席は、われわれの幹部の隊列のなかの「**多くのものが、敵味方の区別さえつかず、たがいに結託し、敵によってむしばまれ、分化、瓦解させられ、ひきずり出され、送りこまれている**」と指摘している。毛主席はさらに、「**この調子でゆくなら、それほどながい期間がたたなくても、つまり、短くて数年、十数年、長くて数十年もたてば、不可避的に全国的な規模の反革命の復活があらわれ、マルクス・レーニン主義の党は修正主義の党にか**

わり、ファシストの党にかわり、中国全体が変色してしまうであろう」とのべている。ここで重点的にのべられているのも、党内の、ブルジョアジーによってひきずり出され、送りこまれた連中がもっとも危険だということである。

一九六四年七月、毛主席はプロレタリア革命事業の後継者の問題について語ったとき、「フルシチョフ修正主義の中国での再演を防ぐ問題」をとりあげ、プロレタリア革命事業の後継者にとっての第一の条件は、ほかでもなく、「かれらは真のマルクス・レーニン主義者でなければならず、フルシチョフのようにマルクス・レーニン主義の看板をかかげた修正主義者であってはならない」とのべている。

一九六五年一月、毛主席は『農村の社会主義教育運動のなかで、いま提起されているいくつかの問題』で、「運動の重点は、党内の資本主義の道をあゆむ一部の実権派を粛清することにある」と指摘している。

ここ数年らい、毛主席はまたたびたび、修正主義があらわれることに警戒しなければならず、とりわけ中央に修正主義があらわれることに警戒しなければならない、と指摘している。

数年にわたる準備ののち、毛主席はみずからプロレタリア文化大革命をおこし、指導した。

この大革命の主要な目的は、資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派をうち倒すこと、とくに資本主義の道をあゆむ党内最大のひとにぎりの実権派をうち倒すことにある。これは、現段階におけるわが国の、複雑にからみあった各種の矛盾を分析して、つかみ出した主要な矛盾である。

当面の闘争の新しい情勢と結びつけ、この一年らいの革命的実践と結びつけて、われわれが『通知』を学習するさい、もっとも基本的な要求は、主要な矛盾をつかみ、闘争の方向をどこまでもしっかりと把握することであり、さまざまな副次的矛盾のために目をそらし、闘争の大方向をそらしてはならないということである。

毛主席はわれわれに、「どのような過程を研究するにも、それが二つ以上の矛盾の存在する復雑な過程であるならば、全力をあげてその主要な矛盾をみいださなければならない。その主要な矛盾をつかめば、すべての問題はたやすく解決できる。これは、マルクスの資本主義社会についての研究がわれわれに教えている方法である。また、レーニンとスターリンは帝国主義と資本主義の全般的危機を研究するさいにも、ソ連の経済を研究するさいにも、この方法を教えている。ところが、何千何万という学問家や行動家は、この方法が理解できないために、五

里霧中におちいり、核心がみつからず、したがって矛盾を解決する方法もみつけられない」と教えている。プロレタリア文化大革命のなかで、階級関係が急激に変化している際には、なおさら、主要な矛盾をつかむことに注意をはらわなければならない。

主要な矛盾をつかんではじめて、左派の隊列を発展させ、強大化し、広範な大衆と広範な幹部を結集させ、革命的な大連合を実現し、資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派を最大限に孤立させることができるのである。われわれは力を集中してこの主要な矛盾を解決し、政治、思想、理論の各面から、資本主義の道をあゆむ党内最大のひとにぎりの実権派を徹底的に批判し、かれらが各戦線にばらまいた害毒を一掃しなければならない。

左派の大衆組織の間にも矛盾が存在している。このような矛盾は、左派内部の是非の矛盾である。あるものは、あるひとつの問題で、一方が正しく、他方が正しくないといったようなことである。あるものは、あるひとつの問題で、一方に誤りがいくらか多く、他方に誤りがいくらか少ないといったようなことである。また、あるものは、一方がこの問題では正しいが、あの問題では誤っており、他方がそれとはちょうど逆だといったようなことである。うえにのべたさまざまな矛盾には、原則的な意見の相違が存在している。しかし、かれらの間の矛盾は副

次的なものであり、かれらの対立面はいずれも資本主義の道をあゆむ党内の実権派であって、かれらの大方向は一致しているのである。主要な敵をはっきりと見きわめ、主要な矛盾をつかむなら、左派の大衆組織は、かれらの間の矛盾に正しく対処し、それを正しく解決することができるのであり、敵味方の矛盾を処理する方法をもって相手に対処するようなことはないのである。左派の大衆組織の間の意見の相違は、批判と自己批判の方法で解決すべきである。双方の論争は話しあいによって解決することができる。双方が一時解決できない副次的な問題については、共通点をもとめ相違点をのこしておき、共同して敵にあたるべきである。これは無原則とか、なにごともまるめてしまうとか、折中主義とか、協調主義とかいうものではなくて、革命的大連合を実現するための正しいやり方であり、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の原則性のあらわれである。それとは逆に、左派の組織の間で、たがいに論争の問題にしがみつき、枝葉の問題を天より大きいものとみなして、「内戦」にうき身をやつし、資本主義の道をあゆむ党内の実権派にたいする闘争をゆるめるなら、それこそ原則性に欠くものであり、小集団主義、なわ張り主義、無政府主義の悪質なあらわれである。

左派の大衆組織とはっきりした認識に欠けていたため保守的組織に参加した大衆との関係

は、人民内部の矛盾であって、敵味方の矛盾ではない。主要な矛盾をつかみ、主要な敵をはっきりと見きわめさえすれば、だまされている保守的組織の大衆もブルジョア反動路線の被害者であり、われわれの階級的兄弟であって、かれらが幕裏でかれらをあやつっている悪人とはっきり一線を画し、毛主席のプロレタリア革命路線の側にたちもどるよう、辛抱づよく教育すべきだということがわかるはずである。資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派を最大限に孤立させ、かれらに徹底的な打撃をあたえるためには、われわれは、はっきりとした認識に欠ける大衆にたいして、骨のおれる政治・思想工作をおこなわなければならない。この問題では、**われわれは大衆を信頼することについての毛主席の教えを銘記しておかなければならない。われわれは、プロレタリアートは自已を解放しなければならないばかりではなく、全人類をも解放しなければならず、もしも全人類を解放することができなければ、プロレタリアート自身も最終的に解放をかちとることはできない、という毛主席の指示を実行しなければならない。**だまされて保守的組織に参加している大衆の犯した誤りは認識上の問題に属するものであり、われわれは、かれらが思想を解放し、ふろしきづつみをおろすのを援助しなければならない。かれらにたいしては、説得するほかなく、圧服してはならず、また打

撃、報復をくわえてはならない。かれらが保守的組織を脱退して、革命的組織に参加することには、歓迎の意を表わすべきであり、また、革命に立ちあがるには、はやいおそいはないという原則にもとづいて、正しくかれらに対処し、かれらを差別あつかいしてはならない。かれらがもとの組織を保持しながらも、みずから謀反に立ちあがって、政治的方向を転換させ、銃口を反対の方向にむけ、闘争のほこ先を資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派にむけるなら、これにもやはり歓迎の意を表わすべきで、かれらを差別あつかいすべきではない。このようにすることは、右翼日和見主義でもなければ投降主義でもなく、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の正しい原則である。このようにしてはじめて、プロレタリアートに有利であり、毛主席に代表されるプロレタリア革命路線に有利であり、プロレタリア文化大革命の偉大な歴史的任務を勝利のうちに達成するのに有利なのである。このようにしてはじめて、圧倒的多数の大衆を結集して、自分を不敗の地に立たせることができるのである。これに反対したやり方は、まさに資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派に有利なのである。

保守的組織に参加している大衆は、自分にたいしてきびしい態度でのぞみ、主要な矛盾をはっきりと見きわめ、敵味方をはっきりと区別し、闘争の大方向を把握し、闘争のほこ先を資本

主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派にむけるべきである。誤りを犯せば、それを認めるべきであり、それを改めるべきである。改めさえすればそれでよい。感情でものごとをはこび、ひきつづき方向を見失うようなことがあってはならない。悪人の挑発にかからないよう、警戒心を高めなければならない。

中国共産党中央委員会の一九六六年五月十六日の『通知』を学習するさい、われわれは実際と結びつけ、生きた思想をつかんで、整風をおこない、主要な矛盾をいっそうはっきりと見きわめ、闘争の大方向をいっそうしっかりと把握すべきであり、とくに、力を集中して資本主義の道をあゆむ党内最大のひとにぎりの実権派を徹底的に批判しなければならない。

（『紅　旗』一九六七年第七号）

『偉大な歴史的文献』の学習資料

『紅旗』編集者のことば　『紅旗』編集部、『人民日報』編集部の文章『偉大な歴史的文献』はつぎのように指摘している。『レーニンは、プロレタリアートが権力を奪取したのちに、うち破られたブルジョアジーはプロレタリアートよりも強大であることさえあって、四六時中復活をたくらんでおり、同時に小生産者がたえず新しい資本主義とブルジョアジーを生み出して、プロレタリアート独裁を脅かしており、したがって、これらの反革命的威脅に対処し、それにうち勝つためには、長期にわたってプロレタリアート独裁を強化しなければならず、これ以外に第二の道がないことを見てとっていた。しかし、レーニンはこれらの問題の実際的な解決を待たずに逝去した。スターリンは偉大なマルクス・レーニン主義者であり、かれは実際に党内にもぐりこんだきわめて多くの反革命的ブルジョアジーの代表者、たとえばトロツキー、

ジノビエフ、カメーネフ、ラデック、ブハーリン、ルイコフのやからを一掃した。かれの欠点は、プロレタリアート独裁の歴史的時代全体にわたって、社会に階級と階級闘争が存在し、革命のなかでだれがだれに勝つかの問題は最終的に解決されておらず、下手をすれば、ブルジョアジーが復活する可能性があることを、理論的に認めなかったことである。かれは死ぬ一年前にこの点に気がつき、社会主義社会に矛盾が存在しており、下手をすれば、矛盾が敵対的なものになるかもしれないといっていた。」

これはひじょうに重要な、またひじょうに科学的な論断である。読者がこれらの科学的論断を理解するのを援助するために、数人の同志が簡単な資料をまとめた。ここにそれを発表して、参考に供したいと思う。

レーニンは、プロレタリアート独裁についての多くの理論と実際問題をいくどとなく論述している。この方面でのレーニンの多くの重要な思想は、かれの書かれた『国家と革命』、『プロレタリアートの独裁の時期における経済と政治』、『共産主義内の「左翼主義」小児病』、『ハンガリアの労働者へのあいさつ』などの有名な著作のなかに比較的集中的に反映されている。

プロレタリアートが権力を奪取したのちの長い時期に、階級と階級闘争が存在するかどうか。この問題にたいして、レーニンは肯定的な回答をあたえている。かれは、「階級をなくすことは、長い、困難な、ねばり強い階級闘争によってなされることである。資本の権力がたおされたあとでも、ブルジョア国家が破壊されたあとでも、プロレタリアートの独裁が樹立されたあとでも、（旧社会主義と旧社会民主主義の俗物どもが考えているように）階級闘争はなくならない。それは、その形態を変えるだけで、多くの点でかえっていっそう激しくなる」とのべている。（「ハンガリアの労働者へのあいさつ」、『レーニン全集』第二十九巻）

レーニンはまた、「資本主義から共産主義への移行は、歴史的な一時代である。この時代がおわらないあいだは、搾取者は必然的に再興の望みがのこされていて、この望みは再興の企てに転化する」とのべている。（「プロレタリア革命と背教者カウツキー」、『レーニン全集』第二十八巻）

レーニンは、プロレタリアート独裁の条件のもとでの各階級の状況とそれらのあいだの関係の変化を分析した。かれは、うちたおされたブルジョアジーは、長期にわたって、なお反抗す

る条件と力をもっており、プロレタリアートより強大でさえあると強調して指摘している。搾取階級はみずからの敗北に甘んじてはいない。かれらは四六時中反革命の復活を実現しようとたくらんでいる。

レーニンはつぎのようにのべている。「搾取者、地主と資本家の階級は、プロレタリアートの独裁のもとでも消失しなかったし、また一挙に消失することはできない。搾取者は、打ち破られたが絶滅されてはいない。かれらには、国際的な基盤が、国際資本がのこっており、かれらはこの国際資本の一支店である。かれらには、部分的にいくらかの生産手段がのこっており、金がのこっており、巨大な社会的つながりがのこっている。かれらの反抗力は、まさにかれらが敗北したため、百倍にも千倍にも増大した。国家行政や、軍事行政や、経済行政の『技術』は、かれらにきわめて、きわめて大きい優勢をあたえており、そのためにかれらの役割は、人口総数のうちにかれらが占める割合とは比べものにならないほど大きい。たおされた搾取者と、勝利した被搾取者の前衛すなわちプロレタリアートとの階級闘争は、はるかに激しいものになった。」（「プロレタリアートの独裁の時期における経済と政治」、『レーニン全集』第三十巻）

レーニンは、小生産と小生産者についても科学的な分析をおこなっている。かれは、ブルジョアジーが強大である原因の一つは、小生産の習慣の力が存在していることであるとくりかえし指摘している。レーニンはつぎのようにのべている。「このブルジョアジーの反抗は、かれらが打倒される（たとえ、一国内であれ）ことによって十倍にもなるし、またその力は、国際資本の力、ブルジョアジーの国際的連係の力と強固さにあるばかりでなく、習慣の力、小規模生産の力にもある。なぜなら、小規模生産は、残念ながら、まだこの世におびただしくのこっていて、この小規模生産が、資本主義とブルジョアジーを、たえず、毎日、毎時間、自然発生的に、大規模に生みだしているからである。すべてこういう理由からして、プロレタリアートの独裁は必要である。」（「共産主義内の『左翼主義』小児病」、『レーニン全集』第三十一巻）レーニンはさらに、「集中化された大ブルジョアジーに打ち勝つことは、何百万もの小経営主に『打ち勝つ』ことよりも、千分の一も容易である。小経営主は、日常的に、日ごとに、気づかない、とらえどころのない腐敗作用をおよぼす活動によって、ブルジョアジーに必要な結果、ブルジョアジーを復活させる結果そのものを実現している」とのべている。（「共産主義内の『左翼主義』小児病」、『レーニン全集』第三十一巻）

レーニンはこうした方面から、プロレタリアートが権力を奪取したのちの階級闘争の鋭さと複雑さを論述し、ブルジョアジー復活の危険を克服するには、プロレタリアート独裁を強化することが唯一の道であるといっている。

レーニンは、「共産主義への発展は、プロレタリアートの独裁をつうじておこなわれるのであって、それ以外の進み方はありえない。なぜなら、資本家的搾取者の反抗をうちくだくことは、他のだれでもできないし、また他のどんな方法によってもできないからである」といっている。（「国家と革命」、『レーニン全集』第二十五巻）

要するに、レーニンは、プロレタリアートが権力を奪取したのちに、うち破られたブルジョアジーはプロレタリアートよりも強大であることさえあって、四六時中復活をたくらんでおり、同時に小生産者がたえず新しい資本主義とブルジョアジーを生み出して、プロレタリアート独裁を脅かしており、したがって、これらの反革命的脅威に対処し、それにうち勝つためには、かならず長期にわたってプロレタリアート独裁を強化しなければならず、これ以外に第二の道はないことを見てとっていたのである。しかし、レーニンは一九二四年に逝去し、これらの問題を実際には解決しなかった。

レーニンの死後、スターリンがレーニンの偉大な事業をうけ継ぎ、ソ連共産党とソ連人民を指導して、プロレタリアート独裁をまもり、強化し、社会主義的工業化と農業集団化を実現して、社会主義革命と社会主義建設の偉大な成果をかちとった。

スターリンは偉大なマルクス・レーニン主義者であり、かれは実際には、党内にもぐりこんだきわめて多くの反革命的ブルジョアジーの代表者、たとえばトロツキー、ジノビエフ、カメーネフ、ラデック、ブハーリン、ルイコフのやからを一掃した。

党内にもぐりこんだトロツキーら反革命的ブルジョアジーの代表者は、レーニン主義の不俱戴天の敵であった。かれらは革命の一連の重大な問題で、あらゆる手をつかってレーニン主義路線を破壊し、社会主義革命をやく殺しようとしていた。

トロツキーは、一国における社会主義の勝利は可能であるというレーニンとスターリンの理論に反対して、反動的な「永続革命論」をうち出し、民族国家のわく内では、「物質面での世界経済にたいする依存」から抜けだすことは不可能であるとか、自力更生で社会主義建設をすすめることは不可能であるとかいった。

トロツキーは、プロレタリアート独裁に反対して、プロレタリアート独裁は、かならず広範

な大衆と「反目衝突」をひきおこすといいはり、国家機構を「これまで耳にしたこともなかった、強制的な道具」、「人民の独立をやく殺する」ものに発展させているとスターリンを中傷し、攻撃した。

トロツキーはさらに、プロレタリアート独裁の指導勢力――共産党に集中的な攻撃をあびせた。レーニンの死後に、トロツキーは「党内民主主義の回復」、「官僚主義反対」、「集団指導の確立」を看板にして、スターリンを先頭とする党中央の正しい指導に反対し、ソ連共産党（ボ）をブルジョアジーの政党、すなわち資本主義を復活させる修正主義の党に変えようとした。

トロツキーはまた、社会主義的工業化と農業集団化を気違いのように攻撃し、なんとかして資本主義復活を実現させようとした。トロツキーは、ソ連には発達した工業がないので、農業集団化の実現は、「盲目的で、粗暴で、冒険的な方法」にすぎないとわめきたて、「超工業計画」なるものをもち出して、農民にたいする税をふやし、それによって労農同盟を破壊し、都市と農村との経済的つながりを破壊し、工業の基盤を破壊しようとした。

ジノビエフとカメーネフも、ソ連は技術的にも、経済的にもたちおくれているので、社会主

義の勝利は不可能であるとわめきたてた。一九二六年の夏、ジノビエフはトロツキーと反党同盟を結び、一連の重大な問題で、トロツキーと調子をあわせた。

スターリンは、『レーニン主義の基礎』、『レーニン主義の諸問題について』、『問と答』など一連の著作を著わして、トロツキーの日和見主義の謬論をするどく批判し、レーニン主義をまもった。スターリンは、「われわれの社会主義建設の可能性にたいする不信は、清算主義と変質にみちびくのである」と指摘している。（「問と答」、『スターリン全集』第七巻）スターリンは、ソビエト政権は依拠すべき強大な労農同盟があるので、国際プロレタリアートと植民地・半植民地人民の支持のもとに、一国内で社会主義を勝利させることが可能であると認めている。スターリンは、トロツキーの謬論の実質は、「ブルジョア民主共和国に道をひらく」ことであると指摘している。（「ソ連共産党（ボ）第十六回大会における中央委員会の政治報告」、『スターリン全集』第十二巻）スターリンは、トロツキーの「党内民主主義の回復」などの謬論は、党を瓦解させ、党の統一を破壊し、党の背骨をたたき折ろうとするものであると暴露している。スターリンは、トロツキー派は「口先では工業化の支持者であるが、実際には工業化反対者の助手である」と指摘している。（「ソ連共産党（ボ）内の反対派ブロッ

グについて」、『スターリン全集』第八巻）

ラデック、ブハーリン、ルイコフは、公然と富農の利益を擁護して、「階級闘争消滅論」をうち出し、社会主義のかちとる勝利が大きければ大きいほど、階級闘争はますます緩和され、階級敵は抵抗せずに引きさがるであろうし、富農は社会主義に「平和的に成長する」ことができるであろうなどといい、これによって農業集団化に対抗した。

スターリンは、ブハーリン、ルイコフのやからは党内における富農の代理人であって、ブハーリンの「階級闘争消滅論」の害毒は、「それが労働者階級をねむりこませ、わが国の革命的諸勢力の動員態勢をほりくずし、労働者階級の動員を解除し、資本主義的分子がソビエト政権を攻撃することを容易にする点にある」と指摘している。（「ソ連共産党（ボ）内の右翼的傾向について」、『スターリン全集』第十二巻）

ソ連共産党とソ連人民は、スターリンの指導のもとに、トロツキー、ジノビエフ、ブハーリンなど党内にもぐりこんだ一群のブルジョアジーの代表者にたいして、くりかえし、断固とした闘争をすすめ、かれらの日和見主義路線を徹底的に破産させ、ついにかれらをあいついで党内から一掃した。

ソ連が社会主義の国家の工業化と農業集団化を実現したのち、すなわち生産手段所有制の社会主義的改造を基本的に完成したのち、スターリンは、一九三六年十一月にひらかれた第八回臨時全同盟ソビエト大会において、『ソ連憲法草案について』という報告をおこなった。この報告は、ソ連の社会主義革命と社会主義建設の偉大な成果を正しく総括しているが、同時に、そこにスターリンの理論面における欠点を集中的に反映している。

スターリンは、プロレタリアート独裁の歴史的時代全体にわたって、階級と階級闘争が存在することを理論的に認めなかった。かれは『ソ連憲法草案について』のなかで、つぎのようにのべている。「地主階級は、国内戦争が勝利をもって終結した結果、すでに絶滅されてしまった。その他の搾取諸階級についていえば、これらの階級は、地主階級と運命を共にしたのであった。工業の領域では資本家階級がなくなった。農業の領域では富農階級がなくなった。商品流通の領域では大商人および闇商人がなくなった。こうして、搾取階級すべてが絶滅されてしまうことになったのである。」　のこった「労働者階級と農民との境が、同じくこれらの階級とインテリゲンチアとの境が洗いさられていき、ふるい階級的特殊性も消滅していく。それは、これらの社会的グループのあいだの距離がますます小さくなっていくということを意味し

ている。」「これらの社会的グループ間の経済的矛盾が凋落し、洗いさられていく。」「これらの社会グループ間の政治的矛盾もまた凋落し、洗いさられていく。」（『レーニン主義の諸問題』、人民出版社一九五〇年版）

スターリンはまた、「生産関係が生産力の性格と完全に適応したばあいの例は、ソ連における社会主義的国民経済であって、そこでは生産手段の社会的所有制が生産過程の社会的性格と完全に適応している」とのべている。（『弁証法的唯物論と史的唯物論』）

スターリンは、プロレタリアート独裁の歴史的時代全体にわたって、革命のなかでだれがだれに勝つかの問題は最終的に解決されておらず、下手をすれば、ブルジョアジーが復活する可能性があることを、理論的に認めなかった。かれは『ソ連憲法草案について』のなかで、「国民経済のすべての分野における社会主義的制度の完全な勝利ということは、いまや事実なのである」とのべ、さらにまた、「人間による人間の搾取が根絶され、絶滅され、生産用具と生産手段の社会主義的所有制が、わがソビエト社会の確固不動の基礎として確立された」とのべている。（『レーニン主義の諸問題』）

しかし、スターリンは確固たるプロレタリア革命家であった。かれはさらに多年にわたる闘

争の実践を経たのちに、晩年になってこの点に気づき、社会主義社会には矛盾が存在しており、下手をすれば、矛盾が敵対的なものになる可能性があるといった。

スターリンは死ぬ前年、すなわち一九五二年に、『ソ連における社会主義の経済的諸問題』という著作を発表した。かれはこの著作のなかで、社会主義制度のもとで、生産関係と生産力のあいだには、なお矛盾が存在する、と指摘している。かれはヤロシエンコを批判した部分でつぎのように書いている。「同志ヤロシエンコは、社会主義制度のもとでは、社会の生産関係と生産力とのあいだに、なんの矛盾もないと断言しているが、それはまちがっている。もちろん、われわれの現在の生産関係は、生産力の発展に完全に照応しており、生産力を大車輪で前進させている時期にある。だが、これに安んじて、われわれの生産力と生産関係とのあいだには、なんの矛盾も存在しないと考えるのはまちがいであろう。生産関係の発展が生産力の発展よりもおくれており、こんごもおくれるであろうかぎり、矛盾はたしかに存在しているし、また存在するであろう。指導的諸機関の政策が正しいときには、これらの矛盾が対立にまで発展することはありえないし、事態が社会の生産関係と生産力とのあいだの衝突にまで進むようなこともありえない。もしわれわれが、同志ヤロシエンコが勧めているような政策に類するまち

がった政策を実行するならば、事態は変わってくるであろう。このばあい、衝突は不可避となるだろう。そしてわれわれの生産関係は、生産力より以上の発展にとってきわめて重大なブレーキとなるかもしれない。」（『ソ連における社会主義の経済的諸問題』、人民出版社一九五二年版）

スターリンの死後、フルシチョフ修正主義集団は、最初の社会主義国家ソ連の党と国家の指導権をのっとり、プロレタリアート独裁をブルジョアジー独裁に変え、資本主義復活をおこなった。これは国際プロレタリアート独裁史上におけるもっとも大きな教訓である。

われわれの偉大な指導者毛主席は、ソ連の歴史全体の経験に十分な注意をはらい、その一連の偉大な著作と指示のなかで、中国共産党中央委員会の一九六六年五月十六日の『通知』――この偉大な歴史的文献のなかで、またみずからおこし、指導しているプロレタリア文化大革命の偉大な実践のなかで、プロレタリアート独裁の条件のもとでの階級闘争と革命の一連の重大な問題を正しく、全面的に解決した。これはマルクス・レーニン主義にたいする画期的な発展である。

（『紅　旗』一九六七年第七号）

通 知　偉大な歴史的文献

1967年　初版発行　　**定 価 40 円**

出 版 者　外 文 出 版 社
（北京阜成門外百万莊）

発 行 者　中 国 国 際 書 店
（北京 P.O.Box 399）

編号：（日）3050—1692　　3—J—842P
00028

既刊図書案内

★毛沢東著作★

毛沢東著作選　上製 五八〇円　並製 四四〇円

本書は、日本の広範な読者の毛沢東著作学習の必要にこたえて、毛沢東著作選読編集委員会が中国共産党中央委員会毛沢東選集出版委員会の指導のもとに編集した『毛沢東著作選読（甲種本）』（一九六五年四月第二版）を完訳したもので、中国革命の各時期における毛沢東同志の著作の一部三十九編がおさめられている。

毛主席語録　赤色ビニール表紙　一五〇円

中国社会各階級の分析　三〇円

新民主主義論　六〇円

出版者 北京 外文出版社　　発行者 中国国際書店（北京）

延安の文学・芸術座談会における講話　四〇円
アメリカの記者アンナ・ルイズ・ストロングとの談話　三〇円
毛沢東同志は論じている——
帝国主義といっさいの反動派はハリコの虎である　四〇円
「人民に奉仕する」「ベチューンを記念する」「愚公、山を移す」　四〇円
全世界の人民は団結して、アメリカ侵略者と
そのすべての手先をうち破ろう　三〇円
——アメリカ黒人、ベトナム南部人民、パナマ人民、日本人民、コンゴ（レ）人民、ドミニカ人民の反米正義の闘争を支持する声明と談話
敵に反対されるのは悪いことではなく、よいことである　三〇円
書物主義に反対する　三〇円
農業協同化の問題について　四〇円

出版者 北京 外文出版社　発行者 中国国際書店（北京）

★重要決定、理論論文★

国際共産主義運動の総路線についての論戦　三四〇円

目次内容

国際共産主義運動の総路線についての提案
ソ連共産党指導部とわれわれとの意見の相違の由来と発展
スターリン問題について
ユーゴスラビアは社会主義国か
新植民地主義の弁護人
戦争と平和の問題での二つの路線
根本的に対立している二つの平和共存政策
ソ連共産党指導部は現代最大の分裂主義者である
プロレタリア革命とフルシチョフ修正主義
フルシチョフのエセ共産主義とその世界史的教訓
フルシチョフはなぜ退陣したか
付　録
ソ連共産党中央委員会が中国共産党中央委員会にあてた書簡
ソ連共産党中央委員会がソ連各級党組織と全共産党員にあてた公開書簡

出版者 北京 外文出版社　発行者 中国国際書店（北京）

人民戦争の勝利万歳　林彪　四〇円
——中国人民の抗日戦争勝利二十周年を記念して

目次内容

抗日戦争の時期における主要な矛盾と党の路線
統一戦線の路線と政策を正しく実行する
農民に依拠し、農村根拠地を樹立する
新しい型の人民の軍隊を建設する
人民戦争の戦略・戦術を実行する
自力更生の方針を堅持する
毛沢東同志の人民戦争にかんする理論のもつ国際的意義
人民戦争によってアメリカ帝国主義とその手先にうち勝つ
フルシチョフ修正主義者は人民戦争の裏切り者である

中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定　三〇円
中国共産党第八期中央委員会第十一回総会の公報　三〇円

出版者 北京 外文出版社　発行者 中国国際書店（北京）

★美術作品選集、写真集★

ベトナム人民はかならず勝利する！アメリカ侵略者はかならず敗北する！
——ベトナム人民の抗米闘争を支援する中国美術家の美術作品選集　二〇〇円

ベトナム人民はかならず勝利する！アメリカ侵略者はかならず敗北する！
——第四集——（写真集）　四〇円

出版者 北京 外文出版社　発行者 中国国際書店（北京）

近刊預告

★毛沢東著作★

毛沢東選集（第一巻）

哲学論文四編

目次内容

実践論

矛盾論

人民内部の矛盾を正しく処理する問題について

人間の正しい思想はどこからくるのか

文学・芸術について

湖南省農民運動の視察報告

中国の赤色政権はなぜ存在することができるのか

大衆の生活に関心をよせ、工作方法に注意せよ

文学・芸術に関する五つの文献

出版者 北京 外文出版社　　発行者 中国国際書店（北京）